

かつち山のいわれ

ふるさとへ飛ぶころの旅

三浦 衛



みづら・まもる 1957年井川町生まれ。出版社「春風社」社長。著書に「父のふるさと 秋田往来」、詩集「カメレオン」など。横浜市住。

子どものころから村の奥の奥にある山を「かつち山」と呼びならわしてきた。いまもおそらくそうだろうと思う。父も母も、亡くなった祖母も祖父もそう呼んでいたし、歳のいかないうちでもたちまちその名を口にした。かちかち山の「かちかち」とは関係があるのかないのか。それはともかく、かつち山はかつち山として、いつもどつしりと揺らぐことなく存在し、私は、学校の先生に尋ねることもしなかったし、そもそも、改めて言挙げするあたまで持ち合わせなかった。

もののやことが気になり始めた。先人たちの言葉通り、歳を重ねるたびに時の移ろいの速度は日に日に増していき、それと裏腹のように、古いもの、あたりまえと思ってきたものが気になり始めた。自分のこのころなのに、自分の思い通りにならず、このころが勝手に旅をするようなのだ。

気になり始めたひとつが「かつち山」だ。秋田の無明舎出版からでている『秋田の

その呼称を今に残す地域は、鹿角、北秋田、山本、南秋田、河辺、仙北、雄勝等々、秋田のほぼ全域にわたっている。かつちが河内（かわうち）に由来することまでは分かったが、川の上流部を内側と呼ぶ意識なりイメージがどこから生じたものなのかについての疑問は謎のように残った。

よって述べる習慣が定着したという。それは、『論語』雍也篇にある「知者ハ水ヲ楽シビ、仁者ハ山ヲ楽シブ」を承けたものであり、その風を貴くことが文人の徳とされたことも伊藤の『萬葉集釋注』によつて知った。

その時代のものでして山部赤人の歌がある。「やすみし我々大君の 高知らず

時代が平成から令和になり、令和の元号が万葉集にちなむものこともあって、かつてつまみ食いのようにしか読んでこなかった万葉集をあたまたから読み返すことにした。

その途中、意外にも「河内」という言葉に出くわし、目を見張った。

万葉学者の伊藤博（1925〜2003年）によれば、

養老元（717）年の頃から、吉野では、五位以上の高官たちが吉野の山水の美を漢詩に

年に発刊された『井川町史』をひもとくと、井内地域に武士台と呼ばれる場所があることが短く記されている。町史編纂にたずさわったS氏に確認したところ、そう呼びならわされてきたことは幾人かから聞いたが、証拠となる資料はないとのことであった。米寿を迎える私の父も、武士台のことは知

つていて、かつて武士が移り住んだ場所として認識していることはS氏と共通していた。

ここからは私の勝手な想像、空想になる。土地の名にかすかに謂れを残している武士たちは、どういう時代のどういう素性の者たちだったのだろう。どこからどういう理由でやつてきたのか。ただ武士というだけでは、あまりにも茫漠として雲をつかむような話だが、武士の中には和漢の古典籍を読める

さて、私のふるさは秋田県南秋田郡井川町。1986

か、読まなくても相応の知識のある者はいたのではなかったか。万葉集を知っていたかどうかはともかく、山奥に移り住んだ者たちが、人づてに聞いた吉野の宮を遠くあこがれ、寿ぎ、清き河内ぞとしゃれたとのイメージは、それほど突飛とは思えない。

すでになくなっているけれど、私が通った井川東小学校の校歌には、「谷にわき出るせせらぎの きよい井川のほとりには」「しげる山々仰ぐ窓 里はゆたかに開かれて」の歌詞があった。山の奥の奥、かつち山の源流は、武士台に居を構えた武士たちを媒としつつ、奈良の南、美しい吉野の宮につながっているとの想像をかきたててくれる。

私のころはいつしか私を離れ、時空を超え広々とした悠久の時へと、いのちもろとも溶けていくようなのだ。